

から定義を下すと、圖按は衣食住に關する總ての物品を製作する工藝品に適應するやう模様形狀色彩を考按して趣味ある着想を表示したものであるといふてよい、即圖按は製品ではない、製品とならざる前の各種工藝品の製作上に於て必要な下圖である。

之を一口に應用美術と云ひ、是等によつて成されたるものを應用美術品といふ。

その圖按のうちにも多種類があるし、性質も多少異なりたる分類とすることが出来るけれども、要するに廣い意味の美術の一部である。(禁轉載)

イースト氏寫生談

石川 欽一郎

コンボジション
構圖 [下]

構圖の概綱に就ては以上述べたるが、少しく畫の細部に亘りて一言せんに、我畫に一定の畫法あるはよし。只だ之れを墨守せざるよう注意すべし。物の形の同じようなるが畫の此處彼處にありて目につくは宜しからず。尤も同じ形を巧みに配合するは面白けれども、之れは初學者に於ては危險あり。又た畫中の線の角度の關係を能く考察し、餘りきわ立たしむ可からず。就中直線程著しく目立つはなし。又た一箇處に物を畫けば同時に他處に何にかの形ちを作る譯にして、即ち一方に暗らき部分を書けば他方には明るき部分の形ちを残すものなることを心得べし。

和蘭の古畫には木の葉一枚々々を丁寧に畫きたるものあり。極めて忠實にはあれど、同じようなる木の形ちが此處彼處にあり。木の葉も皆同じようにて技も亦皆同じかき方なり。クロード・ブーサンの如き此筆法にして、爲めに樹木に不自然の觀あらしむるを免れず。漸くターナー出で、自然の變化の妙を現はすに至れり。樹木の描法は別の章に於て述べなければ茲には單に構圖上の一材料として説くに過ぎざるが、須ら

く技葉の同じようなる形ちと大いさは避けざる可からずと云ふことを注意し置くべし。

點景人物は構圖上重要なものにて、小なる人物を一つ點ずるは他の大なる無生物を附するよりも著しく釣合を變ぜしむること。大なる樹木等を附加するよりも關係を及ぼす處大なり。暗らき部分中に小なる明るき部分あれば強く感ずること。弱き調子の中に明るき處あるよりも著しかるべく。又た小なる暗き部分が明るき部分の中にあれば、大なる明るき部分が薄暗き部分中にあるよりも著しく感ずべし。

明るき筆も暗き筆も皆構圖を作るの基なれば何れも精緻を極むべし。實際に無用の筆は省かざる可からず。巧妙なる圖とは僅かに一小部分を變更するも直ちに全體を傷ふ如きものゝ謂なり。幅一間もある大なる畫面中に、一寸四方の小部分を變更すとも直ちに全體の釣合を損する如きものなり。構圖の好き畫は取捨すべき箇處なく既に完備せるものにして、之を畫くに當りては、幾多の困苦と練習とを経たりとも之れ何んの徒勞にもあらず。かくして始めて願ふ處を得べきなり。

畫家の中には専ら色彩に重きを置き構圖の可否を顧みざる人あり。併かも追々歲月の久しきを経ば色彩は終に變化を免れずして殘る處は構圖の妙にあれば此妙を見られざれば其畫の價值は遂に求む可からず。要するに構圖は美術上最も肝要なるものにして畫の優劣の別るゝ處は之れなり。

畫中一物と一物との間隔。又た此間隔と畫面の端との間隔が同一なる可からず。線狀と物體とは能く融和すべし。本其他の物の形は勢ひよく畫き筆端を拘束せらるゝ如きことあるべからず。暗らき部分が急に明るき部分に接するは不可なり。其間に稍や薄色あるべし。かくせば畫に厚味と落付とを加ふ。風雨の如き強き光景は空の暗きにより景の硬きも折合ふなり。構圖上色又は線に少しにても不都合の處あらば直ちに眼に着くものにして若し之れが眼につかぬと云ふは未熟なるの致す處なり。又た一物をかくに當りては描法を考究するに先だち之れが特徴を見るべし。即ち柳と杉を松に配合すれば、柳は鮮やかに杉は濫く見ゆる等なり。線も色も遠近法には能く注意すべし。線は互に照應し。又た實際に無趣味の線あらば明暗を配

して修正することを得れども。亦往々反對の線を添綴することあり。之れをなすには熟練と注意とを要すべし。

平地の風景は空を廣く入れて位置を面白く見せしむ。其他幾多の構圖上の方法あるべく。時には畫の一部分を切り取りて位置を面白からしむることあり。尤とも此方法はやたらに爲すべきにあらず。萬止むを得ざるとき。先づ切り取らんとする部分を紙にて覆ひ結果如何を考究して後之れを爲すべし。例へば高山を畫くに當り往々低く圖を取ることにあり。之れを少しく高く見せん爲めには。空を一部分切り取るときは直ちに高さを増すべし。

構圖に就て語るべきことは此他にも猶尠なからず。畫中の一物と一物との照應。明暗の配置等は畫の趣以外に別に考究すべき肝要なる事なるが。是等は所謂構圖法に屬し。極めて興味あるものなれども。畫家にとりては又た極めて困難なる問題なるべし。

瀑布

瀑布の吾人に與ふる感想は、線の美に述べた如く、水は高所より落つる爲め碎けて泡沫となるので白を呈し、飛散するものは霧となるので、これに日が直射するときは日の映は七彩の虹の如く現はれ、輪は二重三重となることがあつて美しいのである、瀧壺は水力のために堀れ、深碧色を現はしてゐる、これを描くには、白は紙の地を現はし、霧の如きものは淡く残すのでホワイトを用ひぬがよい、白の影色は青にインデゴを用ひるのである、稍々大なる彩沫の白は、小刀にて紙を削り、紙の地の白を現はすのである。(丸山晚霞氏、女性と趣味)